
第 4 章

教員研修評価データベースの枠組みの開発

第4章 教員研修評価データベースの枠組みの開発

1. 教員研修評価データベースの目的と基本方針

一人ひとりの教員の研修実態を把握し、それぞれのライフステージにおける研修の個別指導を目的に、教員研修評価データベースの枠組みを開発した。データベースの枠組み開発においては、以下の2点を基本方針とした。

- ✓ 教員自身が課題認識をもてるような情報を蓄積・提供できること
- ✓ 研修の評価・改善に必要な情報を蓄積・提供できること

(1) 教員自身が課題認識をもてるような情報を蓄積・提供

前章にて記載したが、教員自身が自己課題を認識するために、360度評価の結果を教員が参照できるようにすることが肝要である。これにより教員は、校長、他教員、保護者、子どもなどが、自分をどのように評価しているのか把握できるため、自己課題を把握するには有効な手段である。そして、この認識した自己課題を研修計画へフィードバックしてもらうことで、研修内容の改善に資することが可能となる。

次に、研修受講時に実施した自己評価や作業課題に対する講師からの評価を参照できるようにすることも肝要である。また、研修後の授業実践を経て、教員自身と研修講師による事後評価を行うことにより、研修を通じて自分がどのように成長できたか、できていないかなど確認できるようになるため、自己課題の認識に有効である。

(2) 研修の評価・改善に必要な情報を蓄積・提供

前述のように自己評価や研修講師による評価、そして事後評価を蓄積しておくことで、研修理解度などを統計的に分析できるようになる。このような統計情報を活用し、研修内容や評価スタンダードの評価や改善に資することが可能となる。

また、前述の360度評価の情報なども蓄積しておくことで、研修前の360度評価結果と研修実施後の360度評価結果を比較することで、研修の効果が測定できるようにもなる。同様に、教員からの自己課題に関するフィードバックや研修ニーズも蓄積しておくことで、自己課題に対する認識度を件数などで測定できるようになるため、課題認識に対する研修モデルの有効性も評価できるようになる。

また、従来から実施している研修後のアンケート情報も蓄積しておくことで、統計的に研修満足度などを評価できるようになる。この評価結果は、研修計画や内容、評価スタンダードの改善に資するものである。

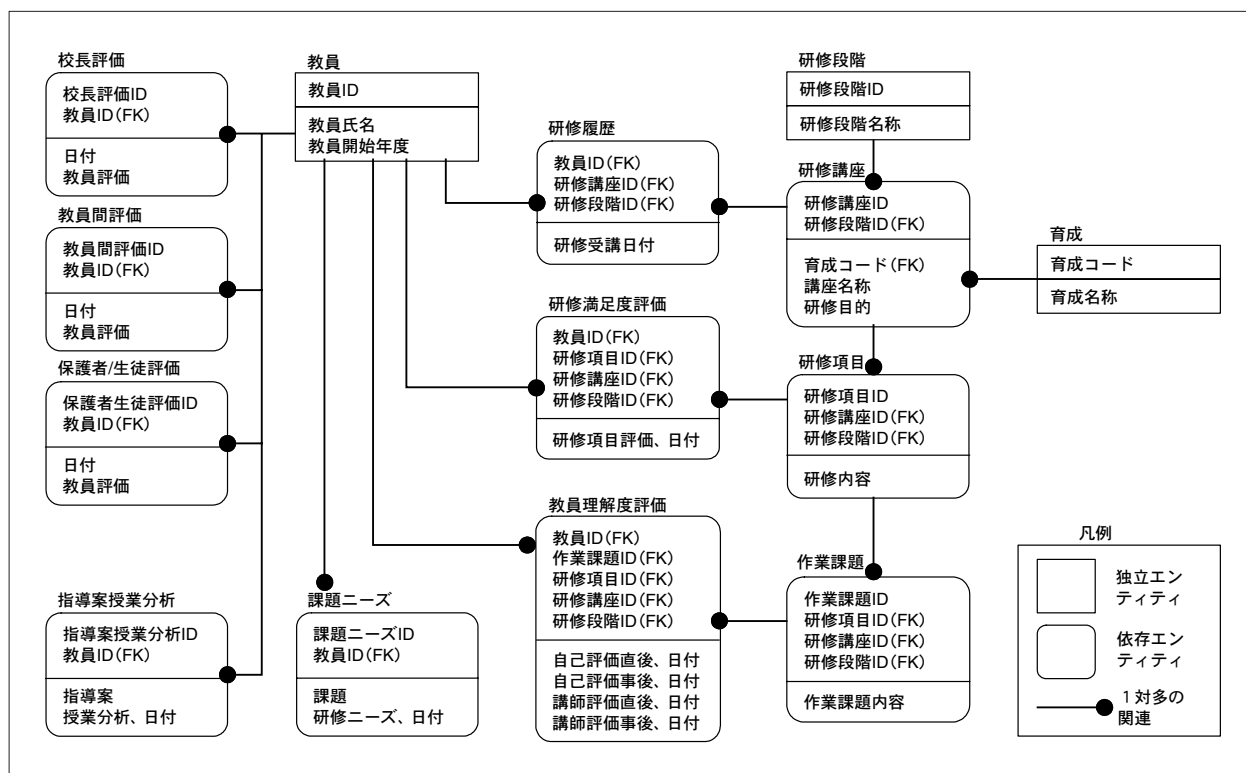
2. 教員研修評価データベースの枠組み

(1) データモデル

前述の目的と基本方針に則り、データベースの枠組みを検討した。枠組みの検討においては、データベース設計に一般的に活用されているデータモデリング手法と表記法を適用した。表記法は、ER図（Entity-Relationship）と言われるデータモデル図であり、情報と情報の関連を正規化した図である。このデータモデルを詳細化することで、データベースの実装が可能となるモデル図である（情報の塊をエンティティと呼ぶ）。例えば、1人の教員は、研修を受講するたびに、研修履歴や研修満足度評価、研修理解度評価の結果情報が増えることになる。すなわち、教員と研修履歴などは1対多の関係となり、これらを表記する表記法である。

教員研修評価データモデルの基本的な考え方は、研修内容（講座や項目など）を体系化したモデルと、教員の間に、研修履歴や評価などの関係を定義する。さらに、教員には360度評価などの情報も関連することになる。

図 教員研修評価データモデル



(2) データモデル補足説明

以下に、前述のデータモデル図の補足説明として、各エンティティの概要説明や、そのエンティティが実際に管理する情報（データ）のイメージなどを記載する。

分類	エンティティ名	エンティティ概要説明	実データイメージ
研修体系管理	研修段階	●研修対象とする段階（年次）を管理する	初年次, 5年次, 10年次など
	育成	●研修にて身につけて欲しい視点を管理する	指導力, 協働力, 学級経営力など
	研修講座	●1つの研修段階に複数の研修講座が存在する ●1つの育成対象に複数の研修講座が存在する ●研修講座の名称やその目的を管理する	名称：授業力養成講座－授業実践の分析と改善－ 目的：学校における教科授業を展開するために必要な基礎力・・・
	研修項目	●1つの研修講座に複数の研修項目が存在する ●研修項目毎の内容を管理する	・自己の授業観の相対化 ・授業力の内容と評価指標
	作業課題	●研修項目毎にその理解度等を把握するための作業課題が存在する ●作業課題の内容を管理する	指定された学習指導案について, 授業展開力・・・グループで構想する
教員管理	教員	●教員の氏名や教員として採用された年次（段階計算の為に必要）を管理する	山田太郎 1990年4月1日採用
評価管理	研修履歴	●教員毎の研修履歴を管理する	
	研修満足度評価	●教員（受講生）による研修項目に対する評価結果（満足度等）を管理する	研修項目：自己の授業観と相対化 評価：5（大変満足）
	教員理解度評価	●教員の研修項目に対する理解度等について, 作業課題毎に管理する ●S,A,B,Cの4段階評価（自己評価, 講師評価を直後, 事後で管理）	研修項目：自己の授業観と相対化 自己評価：A, 講師評価：B
360度評価	校長評価	●校長による教員に対する評価を管理する	
	教員間評価	●同僚による教員に対する評価を管理する	
	保護者生徒評価	●保護者／生徒による教員に対する評価を管理する	
ナレッジ共有	指導案授業分析	●教員が作成した指導案や授業分析結果を管理し, 教員間で共有	
課題認識	課題ニーズ	●教員が, 評価結果の参照や日常の業務にて認識した自身の課題や, 研修に対するニーズ等を管理する	

(3) 必要機能

前述のとおり、今回開発したデータモデルは、以下の2つの基本方針を満たす情報を蓄積・管理することができるものである。

- ✓ 教員自身が課題認識をもてるような情報を蓄積・提供できること
- ✓ 研修の評価・改善に必要となる情報を蓄積・提供できること

情報は、蓄積するだけではなく、それを以下に有効に活用するのかが重要であることはいうまでもない。今回のデータベースの枠組みの開発においては、データモデルだけではなく、定義したデータモデルのデータをどのように活用できるのかまで検討している。

以下に、データを活用するために必要となる情報システムの機能を整理する。整理においては、仮称ではあるが機能名、機能の概要、活用するデータ（エンティティ）、そして誰がその機能を利用するのか、という視点でまとめている。

機能名	機能概要	対象エンティティ	利用者（アクセスコントロール）
研修講座管理機能	研修講座・項目、作業課題等の情報を登録・更新する	【登録・更新・参照】 研修講座、研修項目、 作業課題	教育センター研修 管理者
研修履歴管理機能	教員（受講者）の研修履歴を登録・更新・参照する	【登録・更新・参照】 研修履歴	教育センター研修 管理者
研修評価登録機能	受講した研修に対する評価を登録する	【登録】 研修満足度評価	受講者
研修評価分析機能	受講生の研修満足度等を分析する	【参照】 研修満足度評価	教育センター研修 管理者
教員自己評価登録機能	受講生の作業課題に対する自己評価を登録する。研修直後と実践後の評価を入力。	【登録】 教員理解度評価	受講者
教員講師評価登録機能	受講生の作業課題に対する講師の評価を登録する。研修直後と実践後の評価を入力。	【登録】 教員理解度評価	講師
教員理解度分析機能	研修に対する理解度等を分析する	【参照】 教員理解度評価	教育センター研修 管理者
校長評価登録機能	校長等による教員に対する評価を登録する	【登録】 校長評価	※要検討
教員間評価登録機能	同僚等による教員に対する評価を登録する	【登録】 教員間評価	※要検討
保護者評価登録機能	保護者・生徒による教員に対する評価を登録する	【登録】 保護者／生徒評価	※要検討
360度評価参照機能	教員自身に対する360度評価の内容を参照する	【参照】 校長評価、教員間評価、 教員間評価	受講者

360度評価分析機能	研修受講前と受講後に、360度評価の結果がどのように変化したか等、研修効果の分析を行う	【参照】 校長評価、教員間評価、 教員間評価、教員評価	教育センター研修 管理者
課題ニーズ登録機能	教員が認識した課題や研修ニーズを登録する	【登録】 課題ニーズ	受講者
課題ニーズ分析機能	蓄積された課題ニーズの件数を評価し、教員の課題認識（意識変化）を評価する 課題ニーズ内容を分析し、研修内容改善に活かす	【参照】 課題ニーズ	教育センター研修 管理者
指導案授業分析管理機能	教員が作成した指導案や授業分析内容を蓄積する。必要に応じ、教員間で共有（ナレッジベース）	【登録・参照】 指導案授業分析	受講者
ナレッジ評価機能	蓄積された指導案・授業分析内容の件数等を評価し、教員の課題認識（意識変化）を評価する	【参照】 指導案授業分析	教育センター研修 管理者

3. 教員研修評価データベースの今後の課題

このように、今年度教員研修評価データベース枠組みの開発を行った。今後は、この枠組みに従い、データベースと情報システムの設計・開発・導入を行い、実際に研修評価・改善システムとして研修計画、実行、評価、改善というサイクルを実施することで、このデータベースの枠組みに関する効果が検証されることになる。

研修評価・改善に必要なデータ（情報）は、基本的には今回定義したもので整理できていると考えており、データは普遍的に蓄積・管理されていくものと想定される。効果の検証結果によって、前述の「必要機能」を改善していくことで、効率的・効果的な研修評価改善システムへと発展していくものと考えている。

（松田智幸）